

災害と向き合う ～災害ボランティア～



はじめに

はじめに今年3月11日に起こった東日本大震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

マグニチュード9.0、我が国では1000年に一度の超巨大地震は、大津波を引き起こし、東日本に甚大な被害をもたらしました。新聞やテレビでは今も避難所で暮らしている被災者の方や、復興のガレキ処理に追われる工事関係者の方々の姿が連日報道されています。また、東京電力福島第一原子力発電所の問題もまだ収束には程遠い状態です。

そんな中で、ボランティアの人々が復旧・復興で活躍している話を耳にしました。ボランティアって、どんなことするんだろう、どのようにして参加するんだろう、自分でも役に立てるのだろうか、という疑問がふつふつと湧いてきました。実は、私は16年前の阪神・淡路大震災の時、兵庫県の隣の大阪にいたのですが、当時はボランティアのことを知らなくて、参加を考えることさえできませんでした。その後その存在を知り、今回、被災地のために少しでも役に立つことができるなら…そういう思いでボランティアを取り上げることになりました。

中国の古典に「隗(かい)より始めよ」ということわざがあります。言い出しっぺから始めてみよ、という意味です。そこ

で私は、記事で取り上げる前に、まず自分自身でボランティアに参加してみようと思い、インターネット検索などを通じ、会社の先輩を誘い、宮城県海岸部の巨理町のボランティアに参加してみました。

6月初旬、ある梅雨の谷間の一日でした。私と会社の先輩は朝早く起きて東北自動車道を北上、片道300kmを交代で運転しました。ボランティア専用の夜行バスもあると聞いてはいたのですが、車で行けることを事前に巨理町の社会福祉協議会に確認できており、移動手段は車を選択しました。途中、サービスイリアで休憩をしながら、4時間かけてボランティア受付センターに到着しました。受付センターで名前を登録、「ボランティア保険」の加入証を提示しました。このボランティア保険は、各自の住所地の最寄の社会福祉協議会が発行しているもので、ボランティアの最中、万が一のケガや死亡に備えるものです。逆に保険加入しないとは、ボランティアできない場合があるそうです。服装は、長靴に長袖、軍手、マスクです。

センターの人の車に乗せてもらい、作業場所まで行きました。海岸線に近づくにつれ、被害状況が目に入ってきました。家屋は、コンクリートの土台より上が津波でもっていかれ、田畑は泥と海水で使えぬ物にならなくなっていました。電柱は倒

れ、漁船が陸に上がっている光景さえありました。我々は、あるお寺のお墓に案内されました。何と、墓石がほとんど地震と津波で横倒しになっているではありませんか。もちろん木製の卒塔婆はなぎ倒されていました。土砂やガレキがお墓の敷地に入り込み、我々の仕事はこれを、シヤベルや牧草用のフォークなどでかき出し、水と雑巾とバケツで、泥にまみれた墓石を洗い流すのです。初夏の炎天下、大量の土砂やガレキをかき出す作業はなかなか進みませんでした。しかしボランティアの人数は30人近くおり、人海戦術で一つ一つきれいにすることができました。

熱中症対策のため1時間に1回の休憩のとき、隣に座った学生さんが鉛をくれました。「塩分とつたほうがいいですよ」と。作業を再開して、○○家、□□家と、先祖代々のお墓を10区画くらい掃除しました。午後の強い日差しに私は汗だくでした。疲れも感じていました。

しかし、作業の途中で、親類を震災で亡くした黒い喪服姿の一人の中の男性に、私が墓石を拭いているのを見て、「ありがとうございます」と言われたとき、私は、ああ被災者の人に役に立っているのだな、と強く感じました。復路の東北自動車道は睡魔との戦いでしたが、運転を交代することににより無事帰りました。

ガレキの処理はまだまだ人の手がかかるようです。大きいガレキは重機でいっぺん

に処理することもできますが、機械の手の届かないところは、ボランティアの力が必要とされていると認識することができました。今回は初体験で参加して、ボランティアについてあることがわかりました。「誰にでも参加できるんだ」と。では他の人のボランティア体験談も聞いてみましょう。

ボランティア体験者 インタビュアー（現役）

宮崎県県土整備部技術企画課主幹

奥松 秀樹さん



——まず簡単に「ご自身の経歴を述べて頂けますか？」

入庁以来土木関係の技術職として、今年で27年目です。現在は道路、河川などにおける工事の基準やルール作りを行っています。

——ボランティアに参加しようと思われたきっかけは？

もともと宮崎は災害の多いところですが、大雨や土砂崩れ、道路寸断など技術職として現場を回ってきましたから、被災地の方の大変さを思いました。今回の震災の被害状況をテレビ等で見て、少しでも役に立ちたいと思い、ボランティアをイン

ターネット等で探していました。

——ボランティア休暇制度が使われたとお聞きしましたが。

はい。仕事でなかなか時間がとれない中で、ゴールデンウィークの谷間の5月2日と6日をボランティア休暇を取得し、6日間ボランティアに行くことができました。

——休暇はとりにくかったですか？

私の場合、自分の仕事に関連していたので、現地から学びたいという気持ちもあり勇気を出して休暇申請しました。

——なるほど。ボランティアに参加されるまでの準備を教えてください。

準備には万全を期しました。寝袋、食糧、作業着、ヘルメット、安全靴、軍手、着替えなど……。もちろんボランティア保険にも加入していただきました。

——具体的なボランティアの内容を詳細に教えてください。

私が参加したのは、(独)防災科学技術研究所主催の、行政経験者用のボランティアです。移動手段は自前だったので、宮崎空港から羽田空港、新幹線とレンタカーで、岩手県遠野市の公民館に寝袋で寝ました。

陸前高田市の高台にある駐車上で私は写真の公開の仕事をしました。ガレキの中からもってこられた個人の所有物である写真を刷毛や雑巾で払い、地面に並べます。被災者の方がひっきりなしに自分の

写真を探しにくるのでそれをお手伝いしました。追加で運ばれてくる写真も新たに広げました。それを朝9時から夕方4時まで、4日間ボランティア活動に従事しました。

——写真は見つかりましたか？

けっこう見つけられました。というのも、写真を公開していることが上手く広報され、多くの方が来場し、懸命に探されていました。中には、「○○さんの写真だ」というように知人の方の写真を見つけられる方もおられ、地域の結びつきを感じました。被災者の方は地震と津波で全てを失った方が多く、写真一枚でも大切な宝物です。それを見つけられた方の喜ん



陸前高田市での写真公開

だお顔を今でも忘れることができません。——ボランティアに参加されてどう感じましたか？

テレビ報道である程度知ってはいましたが、現実の世界は、360度、見渡す限りの破壊のスケールの大きさ、静けさや匂いを五感で感じ、驚きました。

また、ボランティアの中には、若い20代の方や、60歳以上のシニアの方、女性の方、東京都、茨城県、静岡県、大分県、北海道の方とさまざまな方がいて励みになりました。

——最後に、現役世代で、ボランティアに参加したことのない人に向けてメッセージをお願いします。

地方公務員の方に限らず、「何か役に立ちたい」と思っている方は多いはずですが、しかし、同時に行くことに躊躇されている方も少なくないと聞いています。

私自身、最初はどんなことをするのか不安でした。しかし実際にボランティアに行ってみると、やるべきことはいっぱいありました。今回、東北地方は甚大な被害を受けましたが必ず復興するはず。その復興の中でボランティアは絶大な力になると信じています。但し、しっかりと調べして、自分の体力を考えることも重要ですが。

皆さんも「役に立ちたい」という気持ちを強い意思に変えて参加されることをおすすめします。参加することが回り回

って自分たちのところに来るかもしれないね。「ごぞろ人のために」という思いを持って参加してみてください。

ボランティア体験者 インタビュー（退職者）

元札幌市職員

清野 和政さん

——はじめに、清野さんのキャリアを教えてください。

私は高校卒業後、大型機械メーカーで技術職に就いていましたが、オイルショックの煽りを受け28歳のとき札幌市職員に転職しました。入庁後は現業職として昨年3月に定年退職するまで、清掃工場で運転業務を担当していました。

定年退職後の身の振り方については、再就職しようか悩みましたが、非正規雇用の若者が増加していることを思えば後の世代に道を譲るべきだと考え、仕事を完全にリタイアすることを決めました。

——定年退職後はどのような生活を？

退職してすぐ、妻と2人で四国八十八箇所を巡拝しました。定年の5年前から情報収集をしたり足腰を鍛えたり着々と準備を進めた甲斐あって、67日間をかけ



野田村での田んぼのガレキ撤去

無事に1500kmの道程を完歩しました。ただし、目標としていた四国別格二十霊場はすべて巡拝することができず、翌年に持ち越すことになりました。四国から戻った後は、趣味の野球観戦やラベンダー祭りなど季節のイベントに出かけたりして日々過ごしていました。

——そのような中、なぜ災害ボランティアに参加しようと思われたのですか？

仙台にいる親戚が被災したということもありますが、直接の動機はテレビで見た被災地の映像です。半壊状態の家の中で不安そうな高齢者を見て、自分にも手助けできることがあるのではと思いついたのです。私は大工仕事が得意なので、その特技も生かせたらと。そこでボランティア

アの受入先をインターネットで探したのですが、「個人でもOK」というのはNPO団体1つしかありませんでした。

早速電話をかけてボランティア登録し、連絡を待つことになったもののなかなか連絡が来ない。そうこうするうちに、震災前より予約していた別格二十霊場の出発日となり再び妻と四国へ行くことに。14日間のお遍路を終え帰宅してからは、とにかく被災地へ行くこうと TENTO や寝袋、食糧や水などの調達を始めました。

北海道苫小牧から仙台に向かうフェリーが4月28日に復旧し、その翌日ようやく取れたチケットを手にマイカーでフェリーに乗り込みました。登録したNPO団体の指示に従って、まずはいわき市でマイカーを使った物資の運搬作業を行い、その後、気仙沼市大島に移動して物資の仕分け作業を行いました。

——仕分け作業はいかがでしたか？

地元自治体職員の陣頭指揮の下、次々に送られてくる支援物資を所定の場所に運ぶ作業はかなりの重労働です。還暦を過ぎた身体で20kg、30kgの荷物を運べたのは、定年後ほぼ毎日スポーツジムで3時間、体を鍛えていたからでしょう。

ただ、物資の仕分けは間接的な作業で、私としてはもっと最前線で作業したいという思いがありました。そんなとき「青森県や岩手県北部の被災地はまだあまり手がつけられず、ボランティアを必要として

いる」という情報を入手。登録していたNPO団体に相談し、個人として北へ向かうことになりました。

国道45号線沿いの陸前高田市、大船渡市と瓦礫の山と化した光景に胸を痛めながら車を走らせていると、途中立ち寄った給油所で「岩手県北部では野田村が最も被害が大きい」という話を聞き、野田村を目指すことにしました。

——野田村では、どのような形でボランティア活動に参加されたのですか？

最初の2日間は震災を免れた隣町の旅館に宿泊しましたが、腰を据えようと決めてからは下宿を借り、毎朝、窓口となっている社会福祉協議会で受付をしてボランティア活動に参加しました。

私は個人ボランティアでしたから、団体で来ているボランティアたちとチームになつて活動をしました。例えば、田んぼに散乱したガレキの撤去であれば、午前9時から午後4時半まで昼休憩1時間を挟んで30人ほどのボランティアで作業します。最初はガレキだらけだった田んぼがきれいに片づけられると達成感があるんですね。それに、見知らぬ者同士が声を掛け合いながら、少しでも被災者の役に立ちたいと気持ちを一つにして作業するのもやりがいにつながります。家の奥まで入りこんだ土砂を掻きだしたり、泥だらけになった陶磁器店の食器を洗ったり、毎日いろんな作業をしました。

——野田村での滞在期間は？

5月11日に開始した活動は運悪く持病の腰を痛めてしまい、予定より2週間早い6月15日で切り上げることになりました。お遍路のときもそうですが、私は自分で一度決めた目標は最後まで達成したい性分です。目標が果たしていない以上、身体を鍛えなおしてもう一度、被災地へ行きたいと考えています。

——最後に災害ボランティアに参加したことのない方へのメッセージをお願いします。

私が今回後悔したのは「もっと初動段階で参加すべきだった」ということです。それは「被災者が一番困っているときに支援することが必要だ」と痛感したから。震災直後、ボランティア活動に気持ちを駆り立てられた人は多かつたはずですが、しかし、実際に参加した人は阪神・淡路大震災より少ないと聞きます。

ボランティア活動に参加するには、時間とお金と体力が必要かもしれません。私自身、阪神・淡路大震災のときは仕事に忙しくボランティアに行こうとは思えなかつた。今回は退職後で時間的に余裕があつたので、自分の気持ちに従って参加することができ満足しています。

年齢が高くてもできることはあると思います。あれこれ心配し過ぎると二の足を踏んでしまいます。「まずは災害ボランティアに参加してみる」。そこから各自がで

きることを見つけて、活動を続けていければいいのではないのでしょうか。

ボランティアを受け入れる側へのインタビュー

宮城県亘理町社会福祉協議会常務理事・事務局長（亘理町役場から派遣）

丸子 司さん



——まず最初に丸
子さんのキャリア
を教えてください
か？

入庁して35年目です。町の役場では税金関係の仕事をしてきました。平成21年4月から亘理町社会福祉協議会に派遣となりました。

——社会福祉協議会では普段はどんな仕事をされていたのですか？

自治体によって内容は違いますが、亘理町では地域防災や、高齢者福祉の援助の仕事をしていました。特に独居老人の介護関係を担っていました。3月11日の震災が起こった後、3月19日に「亘理町ボランティアセンター」を立ち上げ、ボランティアの人を受け入れてきました。8月12日までの累計で、県外8142人、県内2264人（うち町内550人）、合計約1万人です。延べにすると3万199人が参加されました。

——ボランティアに参加される方に対して思うことは？

ボランティアに参加されることは非常に素晴らしいことだと思います。少しでも役に立ちたい、手伝いたいと考える方が多いのは大きな喜びです。こちらが感謝したいくらいなのに、逆にボランティアの方から、「満足の行く仕事ができました」と感謝されたこともあり感動を覚えました。

——学生さんが多いようでしたが……

震災後入学式が5月に延期になったとか、休みの関係なのでしょう。ゴールデンウィーク前では一時県外受け入れを止めたほどです。しかし、親子づれや、年配の方などもいらつしゃいました。中学生以上であれば特に年齢制限は設けていませんから。

——今までボランティアを受け入れてきて、苦労されたことがあれば教えてください。

震災以後、無我夢中でした。支援物資の受け入れや、ボランティアの道具の確保、ニーズのとりまとめ……。社会的なボランティア熱の高まりで、ボランティアの方の仕事のマッチングや手配も大変でした。もともとこれといった手順がなかったのです。

しかし、ある程度パターン化するにつれ、スムーズにボランティアの人を現地に派遣することができるようになりました。おかげさまで、ボランティアの中での泥のかき

Column

ボランティアに参加する前の準備について

事前準備

- ・服装～作業ズボンで、上衣は怪我防止のため長袖がよい
 - ・長靴（中敷きに鉄板の入ったものがいい）
 - ・軍手（ゴムのすべり止めがついたものがいい）
 - ・マスク（防塵用のしっかりしたもの）
 - ・帽子（日射病対策。ヘルメットはボランティアセンターで借りた方がいい）
 - ・水分（天然水、ポカリスエット等）
 - ・食糧（カロリーメイト等、簡単なもの、近くにコンビニがない場合ある）
 - ・虫よけスプレー（夏場）
 - ※近くのホームセンターや、アウトドアショップ、作業衣店、薬局などで手に入ります。
 - ・確認～被災地の社会福祉協議会やボランティアセンターに受け入れ可能か、仕事内容の確認（下記参照）
 - ・手段～被災地まで行くまでの手段（車、夜行バス、電車）、道路地図、時刻表、ボランティアセンターまでの地図
 - ・宿泊～日帰りでない場合、宿の確保（ボランティアセンターによっては、敷地内でテント張りを認める所があります）
 - ・保険～ボランティア保険、各住所地に社会福祉協議会でボランティア保険を受け付けています。
 - 費用：1年間数百円
 - ボランティア保険証
 - ・健康保険証の携帯、現金（ATMが無い場合に備えて用意）
- ※上記は取材で集めた情報をまとめたもので、完全な情報ではないことをあらかじめご了承ください。

各ボランティアセンターの連絡先

野田村VC	080-5949-8093
宮古市VC	090-4478-3984
陸前高田市VC	090-2852-9736
大槌町VC	0193-41-1555
仙台市VC	022-262-7294
石巻市VC	0225-23-6015
気仙沼市VC	0226-22-0722
名取市VC	022-784-3029
多賀城市VC	022-368-6300
岩沼市VC	080-5949-7541
東松島市VC	0225-83-5001
巨理町VC	0223-36-7559

※ボランティアセンターから名称変更している所もあり、上記以外にもありますのでインターネット等でお調べください。

（各社会福祉協議会のホームページ等より）



石巻ボランティアセンター受付



巨理町荒浜地区

出しやガレキの片付けは1332件が完了し、それに関してはニーズが少なくなってきました。今後は、ボランティアの登録制にしてみたら、日を決めてこちらからお願ひしようと思っています。

——そうなんですか。石巻ではまだまだガレキの片付けの仕事が沢山あると聞きましたか？

それは、自治体によってバラツキがあるでしょうね。巨理町では荒浜（津波の被害の大きい海岸部）のあたりでもガレキの片付けがほぼ終わりました。ボランティアの人にポスティングや、チラシ配布などしてもらって、ボランティアのニーズを掘り起こしましたが……。

今後のボランティアの仕事は、仮設住宅の支援などが中心になっていくでしょう。

しかし復興にはまだまだ時間がかかりますから、仮設住宅の巡回や、イベントの企画等、ボランティアの方の活躍の場は出てくると思います。

——受け入れ側として、ボランティアに参加されたことのない方に、メッセージはありますか？

自治体によって状況はさまざまでしょうから、ボランティアにお出かけになる前に問い合わせてください。電話でかまいませんから。

あと、一口にボランティアと言ってもさまざまな参加方法があると思います。ボランティアに来れなくても、例えば千羽鶴を折って送ってもらったり、寄せ書きを書いてもらったり、手紙をもらったりと大変な励ましになりました。自分の出来ることをされるのがいいと思います。気負う必要なくいろいろな形で参加してみてください。

被災地への行政へ 災害時派遣を通じて

今回のテーマは災害ボランティアですが、被災地の行政のマンパワーが不足して、仕事として震災と関わる公務員の方も増

えていると聞いています。そこで、関連として災害派遣業務に携わった2人の方にインタビューしてきました。

三重県県土整備部県土整備総務室
人材開発グループ主管



吉崎 玄徳さん

——今までのキャリアについて教えてください。

入庁してから今年で15年目です。

土木関係が6年、福祉関係が3年、残りがその他の仕事です。現在は県の道路や河川、海岸などを整備する部署に属しています。

——被災地への派遣命令を受けた時どう感じましたか？

私が派遣される以前から、継続的に県職員が派遣されてきましたので、機会があれば自分も参加したいと思っていました。自分の派遣が決まり、業務を通じて少しでも被災地の役に立てれば、という気持ちで現地へ向かいました。

——いつ、どのような内容で被災地で仕事されたのでしょうか？

5月16日から5月21日の1週間、宮城県塩竈市役所へ派遣され、家屋の被害状況の調査にたずさわりました。三重県庁からは8人が派遣され、2人1班で仕

事を行いました。

——具体的には、どのような仕事の内容だったのですか？

家屋の被害状況の調査は、罹災証明の発行の基礎となります。罹災証明は家屋の被害程度に応じて、全壊・大規模半壊・半壊・一部破損に分かれます。私たちが現地へ行ったのは5月の中旬で、震災から2ヶ月以上経った時期でした。一軒一軒住宅を回り、外観調査や内部確認を行い、住んでいる方のお話を伺ったりしました。

——そうですか。仕事を通じて感じられたことは？

被災地の行政のマンパワーが不足し、罹災証明発行が遅れていたの、派遣され手伝うことができ大変よかったと思います。仕事を通して被災地の役に立つ、ということが多少なりとも実現できたかなと思います。

それから、余震も続いていたため、家屋については「今度地震がきたら大丈夫だろうか」という不安を持っている方も多かったです。一人暮らしのお年寄りなど、そういう不安を抱えて毎日生活していることの話などを話される人もいました。メンタル面でのケアも大事な課題だと思っています。

テレビの画面を通して感じることで、実際に現地へ行って見聞きすることで、やはり大きな違いがあると実感しました。

直接、被害の状況を見たり、被災された方の声を聞かせていただくことにより、震災に対する認識も深まったと思います。自分自身、今後どうしたらいいのかという問いも含め、震災のこと、復興のこと、生活の仕方のことなどを考えるきっかけを与えて頂いたと思っています。

——今回我々は、ボランティアを取材しているのですが、吉崎さんはボランティアに参加してみたいですか？

今回、災害派遣業務を通じて、自分自身にとっても貴重な体験をさせて頂きました。今後も継続的な支援が必要だと思いますので、ボランティアも含め、また何かの形で関わっていききたいと思っています。

三重県いなべ市健康こども部
こども家庭課主任

清水 隆弘さん

——今までのキャリアについて教えてください？

入庁してから今年で16年目です。

農林関係、下水道関係、窓口関係、あその他の町等への出向です。現在はこども家庭課で子育て支援や「婚活」などの企画をやっています。

——え、コンカツですか。それをこども家庭課でやっているのですか？

はい。次世代の子どもを育てるという意味からです。当市では、自動車工場の従事者が多く、男性の未婚率が高いものですから人口を定着させようという考えでいます。

——なるほど。被災地への派遣命令を受けた時どう感じましたか？

災害派遣に行くことに対して早い段階から手をあげていました。というのも私は地元の消防団に参加しており、また、三重大学の大学院（社会人コース）で「地域防災のあり方」をテーマに修士論文を書き終わった矢先に震災が起こったので、自分が行くしかないと思ったのです。東北地方で私と同じ消防団員の方が250名以上亡くなったり、行方不明になったりしています。私は使命感にかられ応援したいと思いました。

——いつ、どのような内容で被災地で仕事されたのでしょうか？

4月4日から10日の約1週間です。車で11時間かけて岩手県大船渡市に行きました。

三重県は宮城県支援なのですが、当市に太平洋セメント(株)の工場があり、大

船渡市にもあることから、以前から同市と交流が深かったのです。それでいち早く駆けつけました。そうそう、ここに来るまでに乗ってこられた三岐鉄道も戦前にセメントを運ぶために鉄道が敷かれたんですよ。

——自治体と産業のつながりは大事ですよ。製鉄の関係で北九州市も釜石市に職員を派遣されたとか。

そうなんです。それで、私の仕事は現地といなべ市の調整役です。支援物資



太平洋セメント大船渡工場の様子

のニーズの把握や、いなべ市から派遣された保健師を車に乗せて避難所になっている公民館を訪問したり……。駐在員兼調整官という名称でした。

——仕事上で苦労はありましたか？ また、感じられたことがあったら教えて下さい。

苦労というより体力的に大変でした。宿泊地が岩手県の内陸部の北上市だったものですから朝6時半に出て80kmを運転し、土地勘のない道の運転はきつかったです。高速道路も地震で路面状態が悪くなっていて運転しにくかったです。

しかし調整官という「裏方」として被災者の方をサポートできたことを誇りに思っています。しんどかったですけど仕事にやりがいを感じました。土ぼこりと腐乱した魚の臭いを通じて、テレビよりも多くのことを肌で学びました。

また、滞在中に大きな余震も来て、正直怖かったです。私は大学院で地域防災について研究しましたが、この経験も含め自分の市が被災した場合どういう対応ができるかについて、今後に生かしていきたいらと思っています。

——今回我々は、ボランティアを取材しているのですが、清水さんはボランティアに参加してみたいですか？

参加してみたいですね。自治労の復興ボランティアや、ボランティア休暇制度もあるようです。仕事や家族との両立を

図りながら、被災地に迷惑をかけないように、自分が被災者にならないようにしっかりと準備して自分にできることをしたいと思っっています。

最後に

取材の途中で私は再び東北地方へ「災害ボランティア」に出かけました。2回目は、宮城県石巻市です。新幹線で仙台まで行き、仙台から仙石線に乗り換えしました。仙石線は、一部が津波で線路が断線しており、松島海岸から矢本まで代行バス、再び電車で石巻駅へ。

石巻では専修大学にボランティアセンターがあつて、仕事が沢山あると、事前に電話で確認できていました。内容は取り壊し予定の民家から荷物を出す作業でした。他のボランティアの方と5人のチームを組んで作業しました。1回目のボランティア体験で用意できなかったステレスのインソール（靴の中敷き）と、帽子が役に立ちました。というのも、震度6の地震で築50年の家屋は半壊となり、玄関のガラスが割れ、破れた板から釘が突き出ていました。また、夏の日の炎天下、汗だくになりながら1時間くらい作業を行いました。住民であるおばあさんが生きてきた家屋を襲った地震のすごさを実感したとともに、被災者の方の悲しみを少し分かち合えたような気がしました。

今回の取材を通じて、「災害ボランティア」について考えてみました。3・11以後我々の意識は大きく変わりました。被災地から遠い地域でも放射能や節電の問題を通じて震災と関わっています。従来の豊かな社会の前提基盤であった生命という根源から根本的に揺らぎつつある現在、東北地方の復興のために少しでも役に立ちたいと思う人が多いのではないのでしょうか。他に、義援金を送ったり、避難所に図書を送ったり、赤十字に献血したりといろんな役に立つ手段がありますが、参加できる条件がそろう人は参加してみたいかがでしょうか？ さらに、60歳以上で退職された方は、ライフプランの中の「生きがいづくり」の一つとしてボランティアをそのメニューに加えてみてはいかがでしょうか？

今回、私自身ボランティアに参加してみたい被災地の状況を見て、復興のためには息の長いボランティアによる支援体制が必要不可欠であると認識しました。まだまだ被災地ではボランティアを必要としています。必要としている人のために何かをするというのは本当の意味の人間のレゾナードール（存在意義）の一つかもしれません。これからも、復興のため何ができるか考えてみたいと思います。

（執筆者…協会職員 谷口有史）